

顔のスポーツ賞 高新

レスリング

④

西内悠人(高知南中) 全国中学生選手権男子42キロ級優勝

試合終了を告げるブザーに、なだらかに喜びをかみしめた。昨年6月の全国中学生選手権、前年3位の覇者を集めた、うれしい優勝を決めた西内が、小さい時から切磋琢磨してきた(上村) 律心に推決勝で勝つての優勝だった。ガッツポーズかほほほほほ……闘争心むき出しの試合中、得意な、優しい素顔を見せた。

レスリングを始めたのは幼稚園の年長の時。園の「授業」がきつかった。マッパの上で膝を突いて組み合い、背中がマッパについて負けちゃう。背中がマッパについて負けちゃうというルール。友達、先生、皆中からの倒され「悔しい、悔しい、悔しい」泣いた。

負けず嫌いの性格に火が付いた。家に帰って、母親に「レスリングをやりたい」と言っていた。現在も新種を愛び、後井優史監督が立ち上げていた「高知レスリングクラブ」を、母の由佳さんが見つけてくれた。すべてに通い始めた。

クラブには同じ年の上村がいた。練習で「ボロボロにされた」と泣いた。初の対試合では女子選手に「普通に負けた悔しくて泣いた。練習で先輩の嫌になった時もあった。それが小学一年の時に全国大会、3位となりメダルをもらった」と意識が変わった。「レスリングって面白い。また勝つたい。片足タックルや飛行機投げ……。技をロケットで飛ばした」

何よりも負けが嫌い



選手は勝負を争う。級(田嶋) 63 選手に「ボロボロ」を奪われていた

前年とは違い、不利な体勢になっても冷静な守りの相手にポイントを取らなかった。攻撃ではスピードがある得意のタックルも決めた。接戦でも「勝てる計算がでる」レベル(後井) 監督をながして勝ち進んだ。準決勝の相手は、ともに高知南中に進学した村。10年近く一緒に練習した西内にとっては「親友で、絶対に負けたくないレベル」でも一人の同級生を加えて、三つ子の赤子な存在だ。

「目標は、世界で活躍の選手になれる。光景がある。全国優勝から2ヶ月後のアジア・スクールボート選手権。レスリングが国技と呼ばれる強豪なチームで開かれ、決勝で地元選手を倒した。初のマシントーナメントとして臨んだ表彰式。会場に「君が」

代」が流れる間、観衆は総立ちだった。ぞんぞんとした。表彰のついでに、村から贈られた「一度は」

昨年10月に贈られた。ちょうどそのころ、母から贈られた「疲れたら休んで水を飲め」。練習に取り組みながら、読んだ。接戦中でも本にのって呼吸法を実践。けがをしない、体への進めよう。

3年後の2020年、全国高校総体のレスリング競技が高知で行われる。地元のチャンピオンを。そんな周囲の期待をこえて、頑張ってほしい。それでも「練習をこらして」負けるとか、何よりも嫌いな選手。まだ高知南中を指し、地道に「歩」

(村上和場)